

単元の目標と評価

単元名 ◆ 説話

- 話の展開と登場人物の心情を読み取る
- 説話が読み継がれてきた意義について考える

教材名 「博雅の三位と鬼の笛」
「小野篁、広才のこと」
「大江山」
「学びを広げる 和歌にまつわるエピソード」

1 単元の目標

〔知識及び技能〕(1)ウ、(2)ア・イ・エ〔思考力、判断力、表現力等〕(1)Aア・イ・エ・キ
「学びに向かう力、人間性等」

2 本単元における言語活動

古典の作品や文章を読み、その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて、調べて発表したり議論したりする活動。〔思考力、判断力、表現力等〕(2)Aア

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ● 古典の文の成分の順序や照応、文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。(1)ウ) ● 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。(2)ア) ● 古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。(2)イ) ● 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。(2)エ) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えること。(Aア) ● 文章の種類を踏まえて、古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。(Aイ) ● 作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。(Aエ) ● 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。(Aキ) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 進んで古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深め、文章の種類を踏まえて、古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えようとしている。

一 説話

博雅の三位と鬼の笛 (十訓抄)

小野篁、広才のこと (宇治拾遺物語)

大江山 (古今著聞集)

学びを広げる 和歌にまつわるエピソード

単元設定のねらい

「言語文化」を終えて新たに「古典探究」の世界に入るにあたり、あらためて導入的な教材として説話を配した。説話は分量も短く、内容も端的に主題が提示されており、古文に馴染んでゆくのに適切な教材といえるだろう。

それぞれに特色のある三つの説話を採録した。

「博雅の三位と鬼の笛」(『十訓抄』)は、やや怪異的な趣のある話。異界のものとの交流をさりげなく描いており、生徒にとってはマンガ・アニメなどでむしろ馴染みのある世界だろう。古典が現在とつながっていることを感じ取らせたい。

「小野篁、広才のこと」(『宇治拾遺物語』)は、言葉遊びをテーマとした他愛のない話だが、生徒にももしろさを感じてもらえればよい。

最後の「大江山」(『古今著聞集』)は、いわゆる和歌説話として有名で、古典文学の世界への導入としてふさわしいものである。

以上いずれも、ポイントが明確でわかりやすい話であり、まずは話のおもしろさを捉えることができればよいだろう。ただ黙って読むのではなく、おもしろい点について発言させ話し合わせるなどして、古典の授業が楽しいものだというイメージを持たせたい。

単元で身につけたい言葉の力と言語活動

- 話の展開と登場人物の心情を読み取る
- 説話が読み継がれてきた意義について考える

単元の振り返り

- 話の展開と登場人物の心情を的確に読み取ることができたか
- 説話が読み継がれてきた意義について考えを深めることができたか
- 説話への関心を深め、さらなる学びへの意欲をもてたか

扉写真

わたの原(隠岐諸島)「写真提供」アマナイメジズ

博雅の三位と鬼の笛（十訓抄）

1 教材採録の意図

「言語文化」の中で古文の学習を重ね、歴史的仮名遣いや用言の活用、係り結びの法則などの基礎的な文法事項にも習熟した生徒たちは、言うならば古文を読み味わうための基礎準備を終えた段階である。「古典探究」では、古語や文法事項といった作品読解のための道具をさらに増やすとともにそれらの使い方に習熟し、また、作品世界の持つ時代の文化的背景を適切に理解して、長きにわたって読み継がれてきた古典作品の豊かさに直接触れる経験を生徒に積ませたい。そのために使われる教科書には、定番の教材はもちろんのこと、それらを含んだ上でさらに多様な作品が並んでいることが望まれる。本教科書は、そのような本質的な要望にできうる限り応えようとして作られたものである。

本教科書の冒頭教材として、『十訓抄』から「博雅の三位と鬼の笛」を採録した。本話は、管楽の名人として知られる源博雅と浄蔵に関する逸話と、名笛「葉二」の由来譚から成る。時代を問わず、自身の論理的理解を超えた信じがたい存在に出会った時、我々はそれを人間を超越したもの、すなわち超人的なものと捉えがちである。並びなき名人の技芸や名器に対して、当時の人々が神秘的なイメージを抱き、それに具体的なストーリーを与えて伝説化していたことを感じさせる説話となっている。

主な学習内容は次のとおりである。

- ・音読を通して、話の内容を把握する。
- ・助詞や助動詞の意味に留意しつつ、正確な口語訳を行う。
- ・描写されている逸話の内容を読み取り、説話を読み味わう。

2 作品の概要

① 書名

序に「良きかたをば、これをすすめ、悪しきすぢをば、これを誡めつつ、いまだこの道を学び知らざらむ少年のたぐひをして、心をつくる便となさしむむがために」とあるように、年少者への教訓を目的として作られた説話集である。三巻の中に十項目の教訓を設け、その各項目にふさわしい説話を列挙する。書名はこれに由来する。

② 成立

一二五二（建長四）年十月中頃に成立したと考えられている。序の末尾にある次の記述がその根拠となっている。

「建長四年の冬、神無月のなかばのころ、おのづから暇のあき、心閑かなる折節にあたりつつ、草の庵を東山のふもとに於て、蓮の台を西土の雲にのぞむ翁、念仏のひまにこれをしるし終はること、しかりとなむいへ

り。」

③ 内容

説話集。約二百八十編の説話が収められている。仏教的な思想は乏しく、儒教色が濃い点に特色がある。十項目の教訓は次のとおり。

- 第一、人に恵を施すべき事
- 第二、傲慢を離るべき事
- 第三、人倫を侮らざる事
- 第四、人の上を誡むべき事
- 第五、朋友を撰ぶべき事
- 第六、忠直を存すべき事
- 第七、思慮を専らにすべき事
- 第八、諸事を堪忍すべき事
- 第九、懇望を停むべき事
- 第十、才芸を庶幾すべき事

④ 表現上の特色

後述するように本書の編者は定かではないが、王朝時代の話を最も多く載せていたり、枕詞や序詞を使った序文の表現などから考えるに、王朝貴族文化に対する懐古や憧憬が見取れる。多様な先行文献からの取り込みが認められるが、本書の十項目の教訓に合うよう、手が増えられているのが少なくない。

⑤ 文学史的位

収載されている話の多くは先行する諸書からの引用であるが、編者の見

聞に基づいたものと考えられる説話も含まれている。平清盛やその子重盛の思慮深さを伝える話や、鴨長明や西行に関するものがそれである。本書の成立が平家一門の隆盛から比較的近い時期ということもあり、注目すべきものである。

⑥ 周辺作品との関連

『史記』や『漢書』、経書や道家の書などの漢籍、『万葉集』『大和物語』『江談抄』『俊頼髓脳』『古事談』『宇治拾遺物語』『発心集』『今鏡』などの国書からの引用が認められる。

⑦ 後世への影響

仏教的な思想に拠るところは少なく、むしろ儒教的な発想からの教訓譚が多いこともあり、特に近世期には整版本として広く流布した。

⑧ 編者

六波羅二鷹左衛門入道か。伝未詳。多くの諸本に付された奥書に「或人云、六波羅二鷹左衛門入道作云々。長時時茂等奉公。」とその名が記されているが、北条長時・時茂に仕えたことされるこの人物が何者であるかについては諸説あり、いまだ結論を見るには至っていない。「湯浅氏系図」に「二郎左衛門入道智眼」とある紀伊の豪族湯浅宗業（わねなり）の記事を根拠として菅原為長などの名が挙げられている。

⑨ 出典

『十訓抄』（新編日本古典文学全集51）浅見和彦（一九九七年・小学館）

教材に即した評価の実際		博雅の三位と鬼の笛			
<p>知識・技能 (1)ウ 評価の実際▼形式段落ごとの内容や、登場人物の関係性を理解している。【記述の確認】</p> <p>知識・技能 (2)イ 評価の実際▼用言の活用について理解を深めている。【記述の確認】</p> <p>思考・判断・表現 Aア 評価の実際▼本文の記述を根拠にして話の展開や登場人物の言動を整理している。【記述の分析】</p> <p>思考・判断・表現 Aイ 評価の実際▼説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理している。【記述の分析】</p> <p>主体的に学習に取り組む態度 評価の実際▼進んで用言の活用について理解を深め、説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理しようとしている。【記述の分析】</p>	<p>まとめ</p> <p>6 説話としてこの話もっている特徴について、話し合う。 ◆学習目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。</p>	<p>知識・技能 (1)ウ 評価の実際▼形式段落ごとの内容や、登場人物の関係性を理解している。【記述の確認】</p> <p>知識・技能 (2)イ 評価の実際▼用言の活用について理解を深めている。【記述の確認】</p> <p>思考・判断・表現 Aア 評価の実際▼本文の記述を根拠にして話の展開や登場人物の言動を整理している。【記述の分析】</p> <p>思考・判断・表現 Aイ 評価の実際▼説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理している。【記述の分析】</p> <p>主体的に学習に取り組む態度 評価の実際▼進んで用言の活用について理解を深め、説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理しようとしている。【記述の分析】</p>	<p>学習活動</p> <p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 文学史的な事項について理解し、説話というジャンルを知る。</p> <p>2 登場人物や出来事に注意しながら本文を音読する。</p> <p>3 形式段落ごとの内容を把握し、本文の概要を捉える。</p> <p>4 博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか説明する。</p> <p>5 「鬼の笛」だとわかったいきさつを、順を追って整理する。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>● 説話及び説話集について概説する。</p> <p>● 音読にあたっては、まず教師が範読をし、その後生徒に音読させる。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵とを、名笛「葉二」がつかないでいることを確認する。</p> <p>● 本文中の具体的な記述を根拠として挙げさせる。博雅の三位や浄蔵がどのような人物として描かれているか、適切に読み取る。</p> <p>● 帝が浄蔵に朱雀門で笛を吹くよう命じた理由を考える。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵の生没年を考えた場合、本話には矛盾が含まれている。また、名笛を「鬼の笛」とするなど、現実を離れたところにこの説話が成立していることの意味について、考えさせたい。</p>	
	<p>展開</p> <p>4 博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか説明する。</p> <p>5 「鬼の笛」だとわかったいきさつを、順を追って整理する。</p>	<p>導入</p> <p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 文学史的な事項について理解し、説話というジャンルを知る。</p> <p>2 登場人物や出来事に注意しながら本文を音読する。</p> <p>3 形式段落ごとの内容を把握し、本文の概要を捉える。</p>	<p>知識・技能 (1)ウ 評価の実際▼形式段落ごとの内容や、登場人物の関係性を理解している。【記述の確認】</p> <p>知識・技能 (2)イ 評価の実際▼用言の活用について理解を深めている。【記述の確認】</p> <p>思考・判断・表現 Aア 評価の実際▼本文の記述を根拠にして話の展開や登場人物の言動を整理している。【記述の分析】</p> <p>思考・判断・表現 Aイ 評価の実際▼説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理している。【記述の分析】</p> <p>主体的に学習に取り組む態度 評価の実際▼進んで用言の活用について理解を深め、説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理しようとしている。【記述の分析】</p>	<p>学習活動</p> <p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 文学史的な事項について理解し、説話というジャンルを知る。</p> <p>2 登場人物や出来事に注意しながら本文を音読する。</p> <p>3 形式段落ごとの内容を把握し、本文の概要を捉える。</p> <p>4 博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか説明する。</p> <p>5 「鬼の笛」だとわかったいきさつを、順を追って整理する。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>● 説話及び説話集について概説する。</p> <p>● 音読にあたっては、まず教師が範読をし、その後生徒に音読させる。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵とを、名笛「葉二」がつかないでいることを確認する。</p> <p>● 本文中の具体的な記述を根拠として挙げさせる。博雅の三位や浄蔵がどのような人物として描かれているか、適切に読み取る。</p> <p>● 帝が浄蔵に朱雀門で笛を吹くよう命じた理由を考える。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵の生没年を考えた場合、本話には矛盾が含まれている。また、名笛を「鬼の笛」とするなど、現実を離れたところにこの説話が成立していることの意味について、考えさせたい。</p>
	<p>まとめ</p> <p>6 説話としてこの話もっている特徴について、話し合う。 ◆学習目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。</p>	<p>導入</p> <p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 文学史的な事項について理解し、説話というジャンルを知る。</p> <p>2 登場人物や出来事に注意しながら本文を音読する。</p> <p>3 形式段落ごとの内容を把握し、本文の概要を捉える。</p>	<p>知識・技能 (1)ウ 評価の実際▼形式段落ごとの内容や、登場人物の関係性を理解している。【記述の確認】</p> <p>知識・技能 (2)イ 評価の実際▼用言の活用について理解を深めている。【記述の確認】</p> <p>思考・判断・表現 Aア 評価の実際▼本文の記述を根拠にして話の展開や登場人物の言動を整理している。【記述の分析】</p> <p>思考・判断・表現 Aイ 評価の実際▼説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理している。【記述の分析】</p> <p>主体的に学習に取り組む態度 評価の実際▼進んで用言の活用について理解を深め、説話の特徴を踏まえながら話の展開を整理しようとしている。【記述の分析】</p>	<p>学習活動</p> <p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 文学史的な事項について理解し、説話というジャンルを知る。</p> <p>2 登場人物や出来事に注意しながら本文を音読する。</p> <p>3 形式段落ごとの内容を把握し、本文の概要を捉える。</p> <p>4 博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか説明する。</p> <p>5 「鬼の笛」だとわかったいきさつを、順を追って整理する。</p>	<p>指導上の留意点</p> <p>● 説話及び説話集について概説する。</p> <p>● 音読にあたっては、まず教師が範読をし、その後生徒に音読させる。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵とを、名笛「葉二」がつかないでいることを確認する。</p> <p>● 本文中の具体的な記述を根拠として挙げさせる。博雅の三位や浄蔵がどのような人物として描かれているか、適切に読み取る。</p> <p>● 帝が浄蔵に朱雀門で笛を吹くよう命じた理由を考える。</p> <p>● 博雅の三位と浄蔵の生没年を考えた場合、本話には矛盾が含まれている。また、名笛を「鬼の笛」とするなど、現実を離れたところにこの説話が成立していることの意味について、考えさせたい。</p>

によった。同書は宮内庁書陵部蔵本（片仮名本）を底本とし、国会図書館蔵本、東京大学文学部国文学研究室蔵本、水府明德会彰考館蔵本、国立歴史民俗博物館蔵本および板本（享保六年刊）などによって校訂されている。「博雅の三位と鬼の笛」は、『十訓抄』第十、才芸を庶幾すべき事に載る話である。

〔原典との異同〕
原典にある小見出しは削除し、「博雅の三位と鬼の笛」と題して採録した。読みやすさを考えて、仮名を漢字に適宜改めた箇所がある。また、句読点や鉤括弧にも変更を加えたところがある。なお、採録した「天下第一の笛なり。」以下の本文は削除してある。

3 学習指導の展開と評価

1 評価規準

知識・技能 古典の文の成分の順序や照応、文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。(1)ウ)
知識・技能 古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。(2)イ)
思考・判断・表現 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えること。(Aア)
思考・判断・表現 文章の種類を踏まえて、古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。(Aイ)
主体的に学習に取り組む態度 進んで古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深め、文章の種類を踏まえて、古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えようとしている。

2 学習指導の展開例

〔1時間を想定〕

4 教材の解説

1 大意

博雅の三位（＝源博雅）が月夜に朱雀門の前で笛を吹いていたところ、すばらしい音色が聞こえたので近寄ると、今まで見たことのない人であった。言葉を交わすこともないまま、月夜のために笛を吹き合うことが重なった。博雅の三位がその男と笛を取り替えて吹いたところ、名笛である。その後、笛を取り替えたまま博雅の三位が亡くなった。帝が笛の名手に吹かせてみるが、その笛の持つ音色を出せる人はいなかった。

その後、浄蔵にその笛を吹かせてみると、博雅の三位に劣らなかった。帝は、朱雀門で浄蔵に笛を吹かせた。すると、笛を褒める大きな声だったので、この笛が鬼の笛だとわかった。「葉二」と名づけて、天下第一の笛である。

2 全体の構成

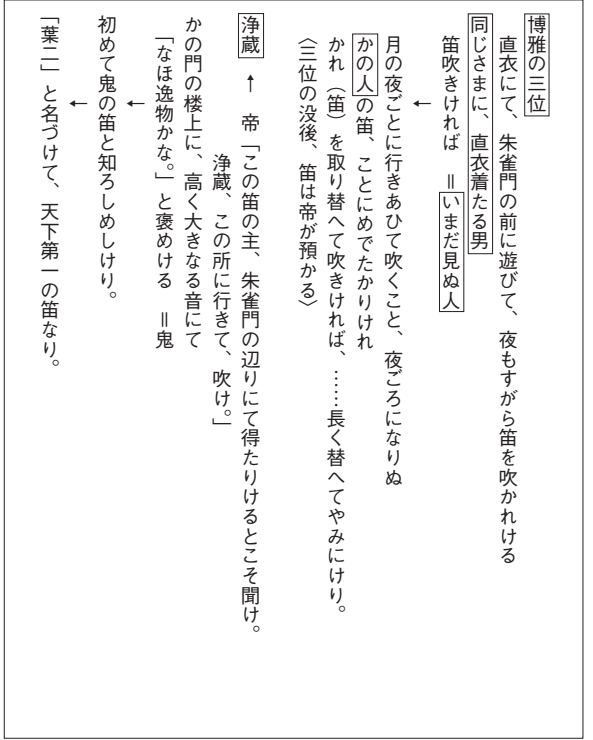
初め 14・6 「夜ごろになりぬ。」	博雅の三位と見知らぬ男との笛の合奏 博雅の三位が月夜に朱雀門の前で笛を吹いていたところ、この世で比べるものがないほどすばらしい笛の音色が聞こえたので近寄ると、今まで見たことのない人であった。互いに言葉を交わすこともないまま、月夜のために笛を吹き合うことが幾夜にもなった。
14・7 「かの人の」 14・11 「なかりけり。」	笛の交換と博雅の三位の死去、その後の笛 博雅の三位がその男と笛を取り替えて吹いたところ、この世のものとは思えない名笛である。その後、笛を取り替えたまま博雅の三位が亡くなった。帝が笛の名手に吹かせてみるが、その笛の持つ音色を出せる人はいなかった。
15・1 「そののち」〜終わり	浄蔵の吹笛と名笛「葉二」 その後、浄蔵という名手にその笛を吹かせてみると、博雅の三位に劣らなかった。帝は、浄蔵に命じて朱雀門で笛を吹かせた。すると、笛を褒める大きな声だったので、この笛が鬼の笛だとわかった。「葉二」と名づけて、天下第一の笛である。

3 品詞分解と口語訳

<p>① 博雅の三位、月の明かり ける 夜、直衣 朱雀門の</p> <p>格助(主格) 形(夕・連用) 助動(過去・連体)</p> <p>前(まへ)に 遊び(あそび) て、 夜もすがら 笛(ふえ) を 吹か(ふか) ぬ(ぬ)</p> <p>格助(場所) 動(八四・連用) 接助(単接)</p> <p>ける(ける) に、 同じ(おな) さま 直衣(なほし) 着(き) たる(たる) 男(をとこ)</p> <p>助動(過去・連体) 接助(単接) 形(夕・連体) 格助(状態) 助動(存続・連体)</p> <p>の、 笛(ふえ) 吹き(ふき) けれ(けれ) ば、 誰(たれ) なら(なら) む(む)</p> <p>格助(主格) 動(力四・連用) 助動(過去・已然) 接助(順接・確定) 助動(断定・未然) 助動(推量・連体)</p> <p>と 思ふ(おも) ほど 誰(たれ) の 音(ね) こ の 世(よ)</p> <p>格助(引用) 動(八四・連体) 格助(時間) 代名(その) 格助(体修) 格助(体修) 代名(この) 格助(体修)</p> <p>に たぐひなく めでたく 聞(き) けれ(けれ) ば、 あやし(あやし)く</p> <p>格助(場所) 形(夕・連用) 形(夕・連用) 助動(過去・已然) 接助(順接・確定) 形(夕・連用)</p> <p>て、 近寄(ちかよ)り て 見(み) けれ(けれ) ば、 いまだ(いまだ) 副</p> <p>接助(単接) 動(三四・連用) 接助(単接) 助動(マ上・連用) 助動(過去・已然) 接助(順接・確定) 副</p> <p>見(み) ぬ(ぬ) 人(ひと) なり(なり) けり(けり)。</p> <p>③ 我(われ) も もの もの を</p> <p>動(マ上・未然) 助動(打消・連体) 助動(断定・連用) 助動(過去・終止) 代名(我) 係助(並列) 格助(対象)</p> <p>も 言(い) は ず、 かれ(かれ) も 言(い) ふ こと なし(なし)。 かく(かく)</p> <p>係助(強意) 動(八四・未然) 助動(打消・連用) 代名(かれ) 係助(並列) 動(八四・連体) 形(夕・終止) 副</p> <p>の 月(つき) の 夜(よ) に 行(い) きあひ(あひ) て 吹(ふ) く(く)</p> <p>格助(体修) 助動(比況・連用) 格助(体修) 格助(時間) 動(八四・連用) 接助(単接) 動(力四・連体)</p> <p>こと、夜(よ) り(り) に なり(なり) ぬ(ぬ)。</p> <p>格助(結果) 動(三四・連用) 助動(完了・終止)</p>	<p>① 博雅の三位（＝源博雅）が、月が明るかった夜、直衣姿で、朱雀門の前で管弦を楽しんで、一晩じゅう笛を吹きなされたところ、同じ姿で直衣を着ている男が、笛を吹いたので、</p> <p>② 誰であろうかと思ううちに、その笛の音は、この世で比べるものがなくすばらしく聞こえたので、不思議に思っ</p> <p>て、近寄って見たところ、今まで見たことのない人であった。</p> <p>③ 自分も一言も言わず、その人も（一言も）言うことがない。このようにして、月の夜に行き合って（笛を）吹くことが、幾夜にもなった。</p>
---	---

博雅の三位と鬼の笛

4 展開図



5 語句・文脈の解説／脚問・発問

14 ページ

1 博雅の三位 源博雅(九一八〜九八〇)。醍醐天皇の第一皇子克明親王の長男。母は藤原時平の娘。右中将従三位皇太后宮権大夫となり、博雅の三位と称される。管弦の名手として知られている。「大鏡」時平伝には、管弦の名手であった藤原敦忠亡き後、博雅が管弦の遊びには欠かせない存在になったという話が記されている(「5参考文獻」「3参考資料」2)

答 笛を奏でて楽しむこと。
▼ 辞書的な意味を理解するとともに、本文に沿って具体的にイメージする。
問 ①「誰ならむ」(14・2)、②「もとの笛を返し取らむ」(14・9)の「む」を文法的に説明せよ。
答 ①推量の助動詞「む」の連体形。②意志の助動詞「む」の終止形。
▼ ①では「誰ならむ」は博雅の三位の心内語となっている。省略されている主語を文脈から補えば、「直衣姿の笛を吹く男」になる。主語が三人称の場合、文末の「む」は推量の意で使われることが多い。一方、②は「かの人の」の会話文として想定されており、補うべき主語は「私」になる。一人称の主語を受ける「む」は、意志を表すことが一般的である。なお、①の「む」は心内語の末尾に置かれ、引用を表す格助詞「と」に続いてるので終止形と答える生徒も少なくないだろうが、「誰」という疑問詞があるので連体形と考えるべきである。

*遊ぶ 曰「自バ四」①心のままに過(こ)して楽しむ。狩猟・行楽・酒宴などをする。②詩歌・管絃(音楽)・舞などを楽しむ。③気ままに歩き回る。④遊戯をする。曰「他バ四」楽曲を演奏する。
*夜もすがら [副]「一晩じゅう。終夜。夜通し。」

3 この世にたくひなく この世で比べるものがなく。直衣姿の男が吹いていた笛が、実は「鬼の笛」であることを暗に示している。
問 「この世にたくひなく」と同様の意味を表す語句を抜き出せ。
答 世になきほど(14・8)
▼ 後に「葉二」と名づけられる笛のすばらしさを、「この世にたくひなく」「世になきほど」と繰り返し強調することによって、それが人間の手に成るものではなく「鬼の笛」であることを暗示している。

第一部 一 説話

参照)。本教材に見られるような笛の名手としての逸話のほか、琵琶の腕にも秀でていて、これに関する伝承も多い。『今昔物語集』巻第二十四・第二十三に載る琵琶の名手蟬丸のもとに三年通つた末に秘曲を伝授された話や、続く第二十四の鬼に奪われた琵琶の名器玄象を取り戻す話などが有名である(「5参考文獻」「3参考資料」3参照)。また、筆(ひら)を吹いて盗人を改心させた話(『古今著聞集』巻第十一・四一九、「5参考文獻」「3参考資料」4参照)や、誕生時に天から音楽が聞こえた話(『古今著聞集』巻第六・二四四、「5参考文獻」「3参考資料」5参照)など、管弦に関わる多くの伝承が残されている。一方で、和歌についてはそれほど得意ではなかったのか、歌合で読み間違えて青ざめたという失敗談が伝わっている(『十訓抄』第一ノ三十八、「5参考文獻」「3参考資料」6)。
1 直衣 男性貴族の日常服。正服や礼服ではない直(ただ)の服の意。下に指貫を履き、頭に烏帽子をつけるのが常であったが、改まった場合には冠をかぶることもあった。教科書巻末(1)「装束」参照。
1 朱雀門 平安京大内裏の外郭門の一つで、南側中央にあった。大内裏の正門に当たる。朱雀大路に面し、これを南進したところに羅城門があった。「しゅじやくもん」とも。教科書巻末(9)「平安京条坊図」参照。
問 「朱雀門」は平安京のどこにあった門か。
答 平安京大内裏の南側中央。
▼ 朱雀門は大内裏の正門であり、平安京の中心を南北に走る朱雀大路の北端に当たる。朱雀大路の南端には、平安京の入り口である羅城門があった。

1 遊び 「遊ぶ」とは、自分の思うままに楽しみ振る舞い、時を過(こ)す意で、その対象は詩歌・管絃・遊山・狩猟など、多様である。平安期においては、詩歌・管絃・舞などを楽しむ意で使われることが多かった。ここでは、笛を演奏して楽しんでいる。
問 ここでの「遊び」の内容を具体的に答えよ。

3 めでたく「めでたし」は、賞美する、ほめるの意の動詞「愛づ」に、程度が甚だしい意を表す「いたし」が付いた「めでいたし」からできた語。対象について、申し分なくすばらしいと賞美する意。
*めでたし 「形ク」①素晴らしい。立派だ。②喜ばしい。
4 あやし「あやし(奇し・怪し)」は、常識では理解できない不思議なものへの驚きやおそれの感情を表す。粗末だ、身分が低い、卑しい意で用いる場合の「あやし(賤し)」も、併せて指導しておきたい。
*あやし 「形シク」曰「①不思議だ。②普通と違っている。珍しい。③疑わしい。④けしからん。曰「①身分や地位が低い。②粗末だ。みすばらしい。」

6 夜ごろ 「ごろ」は、年・月・日などの時間を表す語に付いて、たとえば「年ごろ」であれば数年、「月ごろ」であれば数か月というように、長い時間の経過を表す。ここでは、「夜」に付いて「幾夜」「毎晩」などの意。
*夜ごろ [名]「このところ毎晩。ここの数夜。」

問 ①「いまだ見ぬ人」(14・4)、②「夜ごろになりぬ」(14・6)の「ぬ」を文法的に説明せよ。
答 ①打消の助動詞「ず」の連体形。②完了の助動詞「ぬ」の終止形。
▼ ここでの識別では、助動詞の意味を文脈から適切に判断するとともに、それぞれの活用形が識別の決め手となる。
問 「かの人の」(14・7)とは誰のことか。
答 博雅の三位と共に月夜に笛を奏でる「直衣着たる男」。
▼ 「鬼」と答える者もいるだろうが、話の流れを考えると、その答えは適切ではない。この指示語は、あくまでもそれ以前の内容を受けて使われているものなので、その範囲から答えるべきである。

問 「かれ」(14・7)とは何のことか。
 答 「直衣着たる男」の笛。

8 なほなほ やはり同様に。引き続きいて。笛を取り替えてからも何か月にもわたって、月夜ごとに笛を合奏していたのである。

問 次の傍線部を、助詞の意味の違いに注意して口語訳してみよう。

① 直衣着たる男の、笛吹きければ、(14・2)

② かれを取り替へて吹きければ、(14・7)

③ 行きあひて吹きけれど、(14・8)

答 ①吹いたので、②吹いたところ、③吹いたが

▼ ①・②・③ともに、カ行四段活用動詞「吹く」の連用形に過去の助動詞「けり」の已然形が付き、そこに接続助詞が続いている。

①・②は、接続助詞「ば」が付いて、順接の確定条件を表している。この用法には、「……と、……と」と訳す偶然条件、「……ので、……から」と訳す原因理由、「……といつも」と訳す恒常条件がある。どれが適切であるかは、文脈から判断する。ここでは、

①は原因理由、②は偶然条件で訳すのがよい。生徒の中には、文脈を考えずいつも同じ訳をする者もいるだろう。知識として訳し方の選択肢を有し、それを文章の中で適切に選び取れるように指導していきたい。

③は、逆接の接続助詞「ど」が付く。平安期においては和文では「ど」が、漢文訓読文では「ども」が用いられる傾向があった。中世になると「ど」はあまり使われなくなり、「ども」の使用頻度が増す。言葉は生き物である。時代によって変化していくのは、現在と同様である。

9 長く替へてやみにけり 長い間お互いの笛を取り替えてそのままになってしまった、の意。「やむ」は、おしまいになる、そのままになる、の意。

できる笛吹きがいなくなってしまったのである。名器の持つ神秘性を伝えている。

問 「その音」の内容を具体的に答えよ。

答 博雅の三位が「直衣着たる男」と交換したまま所持していた笛の、この世で比べるものがないほどすばらしい音色。

▼ 笛の名器としての能力を存分に引き出すことができる笛吹きがいなかったということなので、「その音」の内容説明には音色のすばらしさを含むべきである。

15 ページ

1 浄蔵 八九一年〜九六四年。平安時代中期の僧。三善清行の子。平将門が乱を起こしたときの調伏などに験力を示した。『撰集抄』巻七には、京都の一条戻橋の名前の由来となった、浄蔵が死去した父を「しばらく観法して蘇生したてまつられける」話が載る。また、天文や医薬にも秀で、笛の名人でもあった。浄蔵と源博雅とは活躍期が重なっているが、没年は浄蔵が先であり、博雅が死去してから浄蔵が帝に召し出されて笛を吹くという本話の内容には矛盾がある。『江談抄』第三・五〇に、浄蔵が笛を吹きながら朱雀門を通り過ぎる際に、鬼がその音色に感嘆して名笛葉二を浄蔵に与えたという、本話の類話がある(『5参考文獻』③参考資料)7参照。本話は、笛の名人であった博雅の三位と浄蔵を並べ、もともとはそれぞれ別の逸話であったものを、「葉二」をめぐる話として一つにつなげたものではないだろうか。

完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」は、文脈上、「……てしまふ」と完了の意をはっきりと訳したい。なお、「長く替へてやみにけり」と読解して、交換した笛を長い間もとの笛に取り替えないままになってしまつた、と意味を取ることでもできる。

*やむ ①「自マ四」①動きがとまる。終わりになる。②中止になる。③(病気などが)なおる。気持ちがおさまる。④死ぬ。⑤「他マ下二」①とめる。やめる。②(病気などを)なおす。

10 三位失せてのち 源博雅の没年は天元三(九八〇)年。詳しくは後述するが、博雅の三位没後の話に浄蔵が登場するという展開は、齟齬をきたしている。

*失す 「自サ下二」①なくなる。消える。②いなくなる。姿を消す。③死ぬ。亡くなる。④「行く」来る「居る」といった動作について、相手をいやしめて言ふ)行きやがる。来やがる。居やがる。

10 帝 源博雅が活躍していたのは、朱雀・村上・冷泉・円融天皇の治世。博雅没後すぐのことと考えれば、この「帝」は円融天皇。

*召す ①「他サ四」①「呼び寄す」の尊敬語。お呼び寄せになる。②「取り寄す」の尊敬語。お取り寄せになる。③「飲む」食ふ「着る」の尊敬語。召し上がる。お召しになる。④「自サ四」食ふ「着る」の尊敬語。お乗りになる。⑤「補動サ四」(他の尊敬の動詞の連用形に付いて)敬意を強める。

10 時の笛吹き その当時を代表する笛の名手。

11 その音を吹きあらはす人なかりけり 後に明らかになるように、この笛は「鬼の笛」であり、「葉二」と名づけられる名笛である。名器がそのすばらしさを發揮するためには、それにふさわしい演奏者が不可欠である。名手博雅の三位没後は、この笛が持つ能力を存分に引き出すことが

*給ふ ①「他ハ四」①お与えになる。②「……しなさい。……してください。……」になる。③「補動ハ四」①「尊敬の意を表す」お……になる。……なさる。②「せ(させ)たまふ」「しめたまふ」で、高い尊敬の意を表す。お……になる。お……なさる。③「他ハ下二」上代語「受く」「食ふ」「飲む」の謙譲語。いただく。頂戴する。④「補動ハ下二」(思ふ)「見る」「聞く」などの連用形について……せ(させ)ていただく。……ております。

問 「召して吹かせ給ふ」(15・1)の主語は誰か。
 答 帝。

▼ 「召す」「給ふ」といった敬語の使い方から判断する。
 2 御感ありて 「御感」は、天皇や上皇などが賞賛したり感心したりすること。「ごかん」とも。「御くあり」で「くなさる」の意となる。

問 「この笛の主」(15・2)とは誰のことか。
 答 博雅の三位。

▼ 「この笛」を「直衣着たる男」と取り替えて、「朱雀門の辺りにて」手に入れたのは博雅の三位である。三位没後に、帝が「この笛を召して」所持していた。

*仰す 「他サ下二」①命令する。お命じになる。②「仰せらる」「仰せ給ふ」の形で「言ふ」の尊敬語。おっしゃる。

問 「なほ逸物かな。」(15・5)と言ったのは誰か。
 答 朱雀門の鬼。
 ▼ 鬼の姿は具体的に描写されていないが、「初めて鬼の笛と知ろしめしけり」とあることから判断する。

***なほ** 「副」①依然として。②やはり。なんといっても。③そうはいってもやはり。④同じく。同様に。⑤さらに。ますます。いっそう。⑥ちょうど。まるで。

5 **かくと奏しければ** 「奏す」は絶対敬語で、天皇や上皇に申し上げる意の謙譲語。ここでは、帝の命令で朱雀門に行った淨蔵が、博雅の三位が手に入れた笛を吹いたところ、楼上から「なほ逸物かな。」と笛の音を褒める声を聞いたという体験を、帝に奏上している。

***奏す** 「他サ変」①《「言」》の謙譲語《(天皇・上皇・法皇に) 申し上げる。》②演奏する。

***知らしめす** 「他サ四」《「知る」の尊敬語》①お治めになる。②知っていらっしやる。こ存じである。

6 **葉二** 横笛の名器。本教材に続く削除部分〔⑤参考文献〕〔③参考資料〕〔参照〕にあるように、赤と青の二枚の葉が笛に付いていたことによる。『枕草子』第八九段に「御前にさぶらふ物は、御琴も御笛も、皆めづらしき名つきぞある。(中略)水竜、小水竜、宇陀の法師、釘打、葉二、なにくれなど、おほく聞きしかど忘れにけり。」とあり、また『紫式部日記』にもその名が見える。

6 「課題」の解説

一 博雅の三位が笛の名手であったことは、どのようなことからわかるか、説明してみよう。

解答例

・当時の笛の名手たちが吹いて出すことのできなかった笛の音色を、博雅

7 「語句と表現」の解説

一 次の傍線部の用言を文法的に説明してみよう。

- ①月の明かりける夜。(14・1)
- ②得たりけるとこそ聞け。(15・3)
- ③高く大きな音にて。(15・5)

解答例

- ①ク活用の形容詞「明かし」の連用形。
- ②ア行下二段活用の動詞「得」の連用形。
- ③ナリ活用の形容動詞「大きなり」の連体形。

解説

①形容詞には本活用と補助活用(カリ活用)があるが、助動詞に続く場合にはカリ活用となる。
 ②ア行に活用する語は「得」「心得」「所得」の三語のみである。これ以外に「い」「え」と活用している場合はヤ行、終止形が「う」となる場合はワ行である。ここでは完了の助動詞「たり」の上にあるので連用形。
 ③現代語の「大きい」という形容詞は、古語では「大きなり」という形容動詞である。現在の「大きな」という連体詞は、形容動詞の連体形「大きなる」が転じたものである。

8 読み深めるために

『十訓抄』第十「才芸を庶幾すべき事」に収められている本話は、博雅の三位と淨蔵の両者を並べ、彼らがいかに秀でた笛の才の持ち主であったかを示し、併せて「葉二」という天下第一の名笛についての由来を紹介する点に眼目が置かれている。それら二点を読者に印象づけるために、「鬼」

の三位は美しく奏でることができたこと。
 ・誰もがすばらしい音色で吹けるわけではない神秘的な笛を、博雅の三位は美しく奏でることができたこと。
 ・鬼が博雅の前に姿を現し、たびたび合奏したり笛を交換したりするほど、博雅を認めていたこと。

解説

「その音を吹きあらはす人なかりけり」とあり、同じ笛を奏でて博雅の音色は特別にすばらしかったことがわかる。また、他の笛吹きの前には姿を見せなかった鬼が博雅の前に現れ、吹き交わしたことも、博雅の笛の素晴らしさを認めたからだと考えられる。

二 「鬼の笛」(15・6) だどわかつたいきさつを、順を追って整理してみよう。

解答例

帝の命令により、朱雀門のあたりで淨蔵が笛を吹いたところ、楼上から大声でほめる声が聞こえたので、鬼の笛だとわかった。

解説

「初めて鬼の笛と知らしめしけり」の直前に「かくと奏しければ」とあり、その「かく」の内容は「月の夜……褒めける」、淨蔵が出かけたのは帝が「この笛の主……行って、吹け。」と命じたからである。この経過をまとめればよい。

という人間を超越した存在を効果的に取り入れ、説話を形成している。

博雅の三位が笛を取り替えた相手である「直衣着たる男」が実は鬼であったことは、話の最後で明らかにされる。しかし、博雅の三位と「同じさま」であるこの「直衣着たる男」がただ者ではなく、同時に彼が吹く笛が類い稀な名笛であることは、早くから示されている。その音色は「この世にたぐひなく」、その笛は「世になきほどの笛」であると記される。朱雀門の前で長きにわたって一緒に笛を奏でる博雅の三位と鬼は、共に抜きん出た笛の技量を持っていて、お互いがそれを認め合い、この上なく幸せな時間を過ごしていたのだろう。鬼が取り替えた笛を戻さなかったことから、笛吹きとしての博雅の三位の才能を鬼が認めていたことが読み取れる。「我もものをも言はず、かれも言ふことなし」と、言葉を交わすことがなくても、笛の音色を通して濃密な会話を楽しんだであろうことは想像に難くない。

「鬼の笛」の不思議なありようは、博雅の三位の才能をさらに際立たせている。三位が他界してしまうと、この笛が持つ力を存分に引き出すことができる笛吹きがいなくなってしまうのである。名器がそのすばらしさを発揮するためには、それにふさわしい名人の存在が不可欠なのだ。その神秘的な笛を上手に吹きこなす人物として、次に淨蔵が登場している。この笛を博雅の三位に劣らず吹けるということが、淨蔵の笛吹きとしての優れた才能を保証することになる。博雅の三位と淨蔵とは、淨蔵が先に没しており、三位が死去してから淨蔵が帝に召し出されて笛を吹くという本話の内容には矛盾がある。『江談抄』第三・五〇に載る、淨蔵が朱雀門で鬼から名笛葉二を与えられる逸話を改変して、博雅の三位が手に入れた笛の由来を淨蔵が明らかにするという新たな説話を作り上げたと考えられよう。

博雅の三位と淨蔵に関する二つの逸話を一つの話につなげていく上で絶妙の効果を上げているのが、作品の背景として描かれている「月」である。博雅の三位が「直衣着たる男」と出会うのは「月の明かりける夜」であ

る。そもそも月のない闇夜での外出ははばかられるのだから、美しい月に誘われるように出歩き、笛を楽しんでいたのだろう。出会った二人は、その後も「月の夜ごと」に、合奏を楽しんでいる。そして、帝の命を受け、浄蔵が朱雀門へ出向いて笛を吹いたのもまた「月の夜」である。博雅の三位と鬼と浄蔵の三者を包み、話全体を一つにする役割を、この「月」が担っているのだ。

5 参考文献

① 指導者のための参考文献

- 浅見和彦『十訓抄』(新編日本古典文学全集)一九九七年、小学館
- 河村全二『十訓抄全注釈』(新典社注釈叢書)一九九四年、新典社
- 泉基博『校本十訓抄』(一九九六年、右文書院)
- 泉基博『十訓抄の敬語表現についての研究』(笠間叢書)一九九八年、笠間書院
- 大曾根章介・久保田淳ほか編『研究資料日本古典文学 第三巻 説話文学』(一九八四年、明治書院)
- 馬淵和夫監修・説話研究会編『日本の心 日本の説話 三世俗説話』(一九八七年、大修館書店)

② 学習者のためのブックガイド

- 阿刀田高『古今著聞集・十訓抄・沙石集』(少年少女古典文学館13)(二〇一〇年、講談社)

その弟君の敦忠の中納言もお亡くなりになった。和歌の名人で、管絃の道でもすぐれていらつしゃった。お亡くなりになって以降、管絃のお遊びがある時には、博雅三位が、差し支えることがあつて参上しない時は、「今日の遊びが中止になってしまう」と、たびたび召し出されて参上するのを見て、古い人々は、「末世は悲しいものだ。敦忠中納言がいらつしゃった頃は、このような管絃の道で、この三位(がいるかいな)は、帝をはじめとし申し上げて、天下の一大事だと思わねばならないものとは思わなかつた」とおつしやつた。

3 博雅の三位が鬼に奪われた琵琶の名器玄象を取り戻す話

『今昔物語集』巻第二十四
 玄象琵琶、為鬼被取語第二十四
 今昔、村上天皇の御代に、玄象と云ふ琵琶俄に失にけり。此は世の伝はり物にて、極き公財にて有るを、此失ぬれば、天皇極めて歎かせ給て、「此る事無き伝はり物の、我が代にして失ぬる事」と思し歎かせ給も、理也。「此れは人の盗たるにや有らむ。但し、人盗取らば、可持き様無事なれば、天皇を不吉ら思奉る者世に有て、取て損じ失たるなめり」とぞ被疑ける。
 ※片仮名は平仮名に改めた。

小峯和明『今昔物語集』(新日本古典文学大系)一九九四年、岩波書店

【口語訳】
 今となつては昔のことだが、村上天皇のご治世に、玄象という琵琶が突然なくなつた。これは代々(皇室に)伝わる物で、たいへんな朝廷の宝であるのに、このようになつたので、天皇はひどく嘆きなさつて、「このような□□(ことのない伝来品が、私の代になつたこと(だよ))」と思ひ嘆きなさるのも道理である。「これは人が盗んだのであるのか。ただし、もし人が盗み取るならば、(見つからずに)持っていてよいものないことであるので、天皇をよくなく思ひ申し上げる者が世の中において、取つて

③ 参考資料

1 教科書本文「天下第一の笛なり。」以下の削除部分

そののち伝はりて、御堂入道殿の御物になりけるを、宇治殿、平等院を造らせ給ひける時、経蔵に納められにけり。この笛には葉二つあり。一つは赤く、一つは青くして、朝ごとに露おくとひ伝へたれば、「京極殿御覧じける時は、赤葉落ちて、露おかざりける」と、富家人道殿、語らせ給ひけるとぞ。

浅見和彦『十訓抄』(新編日本古典文学全集)一九九七年、小学館

【口語訳】

その後(笛が)伝わつて、御堂入道殿のお持物になつたのを、宇治殿が、平等院をお造りになつた時、経蔵に納めなされた。この笛には葉が二つある。一つは赤く、一つは青くて、朝ごとに露をおくと言い伝えているので、「京極殿がご覧になつた時は、赤い葉が落ちて、露は置かなかつた」と、富家人道殿は、語りなされた(いうことだ)。

2 管絃の名人としての博雅の三位に関する逸話

その御弟の敦忠の中納言もうせたまひにき。和歌の上手、管絃の道にもすぐれたまへりき。世にかくれたまひて後、御遊びある折、博雅三位の、さはることありてまゐらざる時は、「今日の御遊びとどまりぬ」と、度々召されてまゐるを見て、ふるき人々は、「世の末こそあはれなれ。敦忠中納言のいますかりし折は、かかる道に、この三位、おほやけをはじめたてまつりて、世の大事に思ひはべるべきものこそ思はざりしか」とぞのたまひける。

橋健二加藤静子『天鏡』(新編日本古典文学全集)一九九六年、小学館

【口語訳】

壊したのであるようだ」と疑いなされた。

4 博雅が筆箆を吹いて盗人を改心させた話

『古今著聞集』巻第十二・四二九
 博雅の三位の家に盗人入りたりけり。三品、板敷のしたに逃げかくれにけり。盗人帰り、さて後、はひ出でて家中を見るに、のこりたる物なく、みなとりてけり。筆箆一つを置物厨子にのこしたりけるを、三位とりてふかしたりけるを、出でてさりぬる盗人はるかにこれを聞きて、感情おさへがたくして帰りきたりて云ふやう、「只今の御筆箆の音をうけたまはるにあはれにたふとく候ひて、悪心みなあらたまりぬ。とる所の物どもことごとくに返したてまつるべし」といひて、みな置きて出でにけり。むかしの盗人は、またかく優なる心もありけり。

西尾光一・小林保治『古今著聞集 下』(新潮日本古典集成)一九八六年、新潮社

【口語訳】

博雅の三位の家に盗人がはいつた。三位は、板敷の下に逃げて隠れた。盗人が帰り、その後、這い出て家の中を見ると、残っている物はなく、みな取ってしまった。筆箆一つを置物厨子に残してあったのを、三位がとって吹きなされたのを、出でて去つた盗人がはるか遠くでこれを聞いて、感情をおさえきれなくて帰つてきて言うには、「ただいまの筆箆の音をお聞きすると、しみじみ感慨深く尊うございまして、悪心がみな改まった。取る(こととした)物をすべて返し申し上げよう」と言つて、みなおいで出て行つた。昔の盗人は、まだこのように優美な心もあった。

5 博雅誕生時に天から音楽が聞こえた話

『古今著聞集』巻第六・二四四

一 説話

博雅卿は上古にすぐれたる管絃者なりけり。むまれ侍りける時、天に音楽の声聞えけり。

西尾光一・小林保治『古今著聞集 上』（新潮日本古典集成）（一九八三年、新潮社）

〔口語訳〕

博雅卿は昔のすぐれた管絃者であった。生まれました時に、天に音楽の音が聞こえた。

6 博雅の三位の歌合での失敗談

『十訓抄』第一ノ三十八

天徳の歌合に、博雅三位、講師つとむるに、ある歌を読みあやまりて、色変じ、声ふるひける由、かの時の記に見えたり。

浅見和彦『十訓抄』（新編日本古典文学全集）（一九九七年、小学館）

〔口語訳〕

天徳の歌合で、博雅三位が、講師をつとめる時に、ある歌を読み間違えて、顔色が変わり、声が震えたということが、その時代の記録に見えてい

7 浄蔵が朱雀門で鬼から名笛葉二を与えられる話

『江談抄』第三・五〇

また命せられて云はく、「葉二は高名の横笛なり。朱雀門の鬼の笛と号くるはこれなり。浄蔵聖人笛を吹きて、深更朱雀門を渡るに、鬼大声にて感す。それより、この笛を件の聖人に給ふと云々。その後、次第に伝へて入道殿に在り。後一条院御在位の時、藏人某をもつて、この笛を召さる。藏人笛の名なるを知らず。ただ「はふたつ参らせさせ給へ」と申すに、入道殿、「何事も承るべきに、齒二つこそえ欠くまじけれ。もしこの葉二の

笛か」とて進らしめ給ふ」と云々。

後藤昭雄・池上洵一・山根對助『江談抄 中外抄 富家語』（新日本古典文学大系）（一九九七年、岩波書店）

〔口語訳〕

またおっしゃって言うには、「葉二は高名な横笛である。朱雀門の鬼の笛と名づけるのはこれである。浄蔵聖人が笛を吹いて、深夜に朱雀門を通ると、鬼が大声で感心する。それから、この笛を例の聖人に与えなされると云々。その後、次々に伝えて（今は）入道殿（のもと）にある。後一条院が在位の時、藏人某を使って、この笛を取り寄せなせる。藏人は笛の名であることを知らない。ただ「はふたつを献上なさってください」と申し上げるので、入道殿は（わざと）、『どのような事でもお聞きするつもりだが、齒二つは欠かすことができない。もしかするとこの葉二の笛か』と言って献上しなると云々。